

★人権作文の部 特選受賞者と作品

たすけあいっこ

相生小学校一年

桃井 唯月

あいおいしょうがっこうの１ねんせいは、ともだちとわたしのふたりです。ともだちとは、ようちえんのときからなかよしです。わたしがようちえんのとき、にんじゃあそびをするために、みんなでつくったどうぐをはこんでいました。このどうぐは、はしごみたいなかたちをしていました。ひとりではこんでいたので、とてもおもたかったです。「おもたいな。」とおもっていると、ともだちが、「ぼくももつよ。」といってくれました。とてもうれしかったです。もっていたどうぐも、ふたりではこんだらかるくなりました。しょうがくせいになっても、ともだちは、わたしをたすけてくれます。そうじのじかんに、バケツにみずをくんで、「おもたいな。」とおもっていると、「ぼくももつよ。」と、いったたすけてくれます。ともだちがおもたいみずをもっているのを見ると、わたしも、「わたしももつよ。」と、いったふたりでたすけあいっこをします。たすけあいっこをすると、うれしくてやさしいきもちになります。これから、こまったことがあったり、こまったともだちがいたりしたらたすけあいっこをしたいです。

ともだちがふえたよ

若狭野小学校一年

大崎 楓

一ねんせいになって、ともだちが八にんにふえました。わたしは、とてもうれしいです。なぜかというと、みんなであそぶとたのしいからです。なかやすみに、みんなでおにごっこをしました。わたしは、はしるのがだいすきなので、みんなでおもいきりはしるときもちがよかったです。九にんだったら、たのしいきもちもふえました。ほかに、ともだちがふえてうれしいことがありました。それは、みんなのいいところをたくさんみつけたことです。やさしいところ、いっしょうけんめいがんばるところ、だれかがこまっていたらたすけあいつこができるところ、九にんにはいいところがいっぱいです。これからも、やさしくえがおの九にんでなかよくあそんで、いっしょうけんめいべんきょうしていききたいです。そして、いいところをどんどんみつけていききたいなとおもいます。

日本にきて思ったこと

那波小学校二年

グエンビンミン

ぼくは、ベトナムで生まれて、五さいまでベトナムにいました。ようち園のときに、日本にきました。そのとき、ことばがぜんぜんわからなかったです。ぼくが言いたいことが言えなくて、こまりました。でもすぐ友だちができて、いっしょにあそんでたのしかったです。小学校に入って、ベンキようが分かるようになって、うれしかったです。でもランドセルがおもくて、たいへんでした。たのしかったことは、おにごっこです。もっとあそびたいです。ブランコもすきです。ぼくが、きゅうしよくで魚がたべられなくてこまったとき、友だちが、がんばっておうえんしてくれて、たべられてうれしかったです。今は、魚がすきで、よくたべます。ベトナムから日本にくるとき、しんぱいだったけど、きてよかったです。

友だちの大切さ

青葉台小学校三年

溝田 峻人

ぼくは、学校が大好きです。それは、友だちと会えるし、いっぱいあそぶことができるからです。もし、友だちがいなかったら、学校も楽しくないし、学校にも行きたくないと思います。一人だとできないこともあるけど、友だちと力をあわせれば、できることがふえるし、友だちといえることで、楽しいこともふえます。ぼくにとって、友だちは、とても大切なそんざいです。ぼくは、友だちに声をかけてもらってうれしかった時があります。それは、サッカーをしていてこけたときに、「だいじょうぶ？」と、ぼくの所にきてくれたことです。けがをしていたかったけど、その友だちの言葉で少しだけいたさがましになった気がしました。だから、ぼくも友だちがけがをした時や、こまっている時に、やさしく声をかけてあげたいと思います。友だちにたすけてもらったり、やさしくしてもらうと、ぼくも同じようにしてあげようという気持ちになります。こんなふうにみんなが思えたら、やさしさがつながっていったって、けんかやいじめもなくなっていくと思います。これからも、友だちとなかよくして、楽しくすごしたいです。友だちだけじゃなく、こまっている人がいたらだれでもやさしくできるようになりたいです。

私にできる事

中央小学校四年

池田 瑠宇

この間、私が歯医者さんに行った時のことです。その日は、お母さんと二人で行きました。入り口に、車いすに乗ったおばあさんがいました。私は、何か困っているのかな、と思いました。けれど、どうしたらいいのかわからなかったのです。そのまま入ろうとしました。すると、お母さんが、「おもしろうか。」と声をかけていました。私は、いっしょに声をかければよかったと思いました。おばあさんは、「つれがいたので大丈夫です。ありがとう。」と答えました。私は、一言声かけられなかったことを後かいました。その夜、私はひとつの目標を立てました。困っている人がいたら、自分から声をかけよう。口で言うのはかんたんだけど、そのじょうきょうになったら行動できるか心配です。明日から、学校の中で練習しようと思いました。転んだ人がいたら、「大丈夫。」と声をかけて一緒に保健室に行きます。一人でがんばっていたら、「手伝いましょうか。」と声をかけ手伝います。などと、自分ができる事をしたいと思います。お母さんは、何か特別なことをしているのではなく、ふつうに声をかけていました。私もそれぐらいふつうにできたらいいのにな。困っている人がいたら、助けるという当たり前な行動をしている、当たり前な私になりたいです。私の家には、犬がいます。目の不自由な人は、もうどう犬といっしょにいることが多くとてもかしこい犬です。目が不自由な人のサポートをしています。家でかっている犬はほえたりするけれど、もうどう犬はほえません。お店の中につれて入れる店もありますが、入れないお店もあります。私は、どこにでももうどう犬が入れるお店になったらいいなと思います。そんな事が当たり前になっている社会が、すぐ未来に待っていると考えると、楽しくなってきました。みんなが幸せに生活できる社会をのぞみます。

あいさつの大切さ

青葉台小学校五年

大森 遥斗

あいさつに対して、自分で意識するようになったのは、三年生くらいからだったように思います。最近はずいぶん自分からあいさつができるようになりました。しかし、一、二年生のころは、自分からなかなかできなかったし、特に意識するようになってからも、自分から声を出すのが少しはずかしいなと思う気持ちがありました。でも今は、自然と登下校の時などでも会った人に声をかけられるようになりました。以前、お母さんに、あいさつについて聞いたら、あいさつには、「自分の心を開いて、人の心に近づく」という意味があると教えてもらいました。また、おもしろいと思ったのは、あいさつの四かじょうでした。それは、「あ」は、明るく、温かく、「い」は、いつでも、だれにでも、「さ」は、先に、進んで、「つ」が、続けて、次の言葉を、という「あいさつ」という言葉にうまく合わせたものでした。お母さんは、このことを社会人になったときに聞いたと言っていました。また、知らない人に対して、自分から、話しかけるときも、必ずあいさつから始まるし、そこから、人との関係も始まると教えてくれました。ぼくは、その話を聞いて、あいさつには、すごく力があるものなんだなと思いました。そういえば、サッカーを習い始めたときも、知らない子ばかりで、友達もいなかったけど、最初にあいさつと、自こしようかいをしたことで、みんなと話せるようになったことを思い出しました。学校の帰り、ぼくが、「こんにちは。」と、あいさつをすると、地いきの人は、「こんにちは。お帰り。」と、笑顔で返してくれたりします。すると、ぼく自身とても気持ちよくなります。今まで登校班では、五、六年生が先にあいさつをしていたし、ぼく自身、先に言ってくれるだろうと思っていました。でも今年は、ぼくも五年生です。これからは、下級生の手本にならないといけないし、あいさつの大切さも伝えていきたいと思っています。

本当のやさしさ

双葉小学校六年

尾崎 美音

「やさしさ」を辞典で調べると、思いやりがある・困っている子をやさしくいたわると書いていました。あるマンガで「本人に直接、悪口を言ってあげないのがやさしさってやつじゃないの」という一文を見つけました。それって本当にやさしさっていうのかなと疑問に思いました。私は、そんなのやさしさのかけらもないと思います。だって、辞典には思いやりがあるのがやさしさって書いてあるからです。そんな中、私は本当のやさしさについて経験したことがあります。ある日の放課後に友達四人と鬼ごっこをして遊んでいました。けれど、私はすぐにつかまり、おにが continuation しました。その中、お茶もなくなり、私はとてもつかれていました。その時、友達の一人が、「大丈夫？つかれてない？お茶もないみたいだし、おにをかわってあげようか？」と一言声をかけてくれました。私はその一言がとてもうれしかったです。そして、これが本当のやさしさじゃないのかなと思いました。まさに、辞典に書いてあった、思いやりがある・困っている子をやさしくいたわるだったからです。困っていることに気づくのは、とても難しいと思います。なので、やさしいことでもいいと思います。例えば、「前髪切った？」というのもいいと思うし、「それ新しい服？」というのに気づくのもありでしょう。そんなやさしいことに気づいてくれるのもうれしいと思います。私も今、心のやさしい人になれるようにと意識しているけど、なかなか難しく思うようにいきません。けど、やさしいことに気づくだけでもやさしさと感じていた私は、また新しい目標ができました。それは「やさしいことにも気づける心のやさしい人になりたい」です。これからは常にこの言葉を頭に入れて生活していきたいです。

ぼくが同和問題について知ったのは小学六年生の時です。歴史や道德の授業などで被差別部落の人々についてさまざまな学習をし、どのような差別があるのかを知りました。しかし、なかなか身近なものと思うことができず、「自分の周りには起こっていないから関係ない」や「部落の人々はかわいそう」などと思い、他人事のようにとらえていました。また、それは「一部の人だけの問題だ」と思っていました。しかし、さまざまなことを学んでいくうちに、同和問題は結婚問題に関わったり、就職にも関わったりしていることを知り、身近な問題だということを改めて知りました。ずっと昔のことなのに、今でも多くの人の中に残っている部落差別に初めて恐怖心を抱き、「なぜ差別をするのだろう」と思いました。しかし、ぼくの心の中には、どこかこの問題を本気で考えられていない自分がいきました。同和問題について学んでから数日が経った頃、テレビで部落差別についての番組を放送していました。女性が部落出身であることを理由に、結婚を拒否されてしまうという内容でした。その後、司会者が視聴者に「もし自分が結婚を決意した相手が部落出身だったらどうするか」という質問がなげかけられました。ぼくは迷うことなく、結婚する方を選びました。その時はただ、「結婚すると決めたのに人の意見に流されてしまうような人になりたくない」という思いしか持っていませんでした。番組出演者の中で「結婚を迷う」を選んだ人の思いを初めて聞いた時、どこかで安心していました。その人は、自分が世間体を気にしているということを話していました。

実は、ぼくもそうだったからです。だからこそ僕の中には偽りの正義がありました。片方の自分は差別はいけないと思っていました。しかし、もう一方の自分は世間体を気にしていました。ぼくの中で、この二つの思いや偽りの正義の理由には、頭だけで考えているというのがあったと思います。正義を本物の思いに変えるにはどうしたらいいのか考えてみました。そこで気づいたのが、自分の心の弱さでした。自分に厳しくできない自分、偽りの正義ばかり主張する自分。そんな自分を変えるためにできることは、自分と向き合うことです。これまで逃げてきた自分と真正面から向き合うと、弱い自分ばかり見えてきます。そして、向き合った時、自分の友達や家族が大切だからこそ、友達や家族に差別はしてほしくないと言えることに気がつきました。そして、間違ったことをはっきりと間違いだと言うことが、本当に友達や家族を大切にすることだと知りました。これは同和問題に限ることではないと思います。人権問題とは、まず自分と向き合うことから始まると思います。ぼくは人権学習の中で、ある問題を考えるだけではなく、今の自分と向き合えてよかったと思います。向き合うことで自分の良い所も良くない所も見えてきます。そして、いけない所を直そうとすることでよりよい自分になれると思います。ぼくは同和問題を学ぶことで弱い心を見るということを学びました。ぼくはこれから何か迷う場面があったら、今の自分を見つめなおしたいと思います。それが本当に相手を想っている行為なのかということ。

自分らしく生きるために

那波中学校二年

粉原

咲月

人が生きていくうえで大切なことは、『自分らしく生きること。』だと思います。自分らしくとは、何者にもとらわれず、自分の軸をしっかりと持ち、自分を信じてたくましく生きていくことです。そのためにはまず、自尊心を持つことが大切だと思います。でも、今のこの社会では、自尊心を持たない人が多いのではないのでしょうか。その原因として、人が人を差別したり、悪口を言って傷つけたり、罪のない人を悪者あつかいしたりすることが思い当たります。このようなことは、ニュースでもよく目にします。では、なぜそんなことが起きてしまうのでしょうか。私の考えとして、最初は自分の中で妄想や想像していることが、やがて発展していくのではないかということです。始めのうちは、自分の中で妄想や想像している内は、誰も傷付けることはないし、その一時はすごく楽しい時間になります。でも、一歩間違うと、その勝手な想像が人を傷つける武器となってしまうこともあると思うのです。自分の中だけで勝手に想像している間は楽しいかもしれないけれど、その想像の思いを外に広めることで、相手の心を傷つけたり相手につらい思いをさせることになってしまいます。その勝手な思いとは、相手の外見や話し方、話す内容などを見て、その人の本当の姿とは別のもう一人の人物を勝手に作り出してしまふことであるとも思います。このことは、私の体験からそのように思うようになりました。その体験とは、まだ会って間もない人に対して、人から聞いた話だけでその人の人物像を勝手に作り上げてしまい、その人とあまり話もせず関わろうとしなかったけれど、実際に話をしてみると意外に優しくかったり話しやすく良い人で、それまでの自分の想像のイメージとは全然違っていたというものです。この体験から、私は勝手な想像である人のイメージを作ることには怖いことだなと思いました。勝手に私が作り出した相手の人物像を、もし色々な人に話して広めてしまふと、聞いた人には

『悪い人』だと勝手に印象付けてしまうのです。本当はそんな人ではないのに。『悪い人』だと決めつけられると、その人は心が傷つくだけでなく、『自尊心』ですら失ってしまうのです。二つ目の考えとして、相手の事情を知らないのに勝手な想像で相手の悪口を言うことです。例えば、学校を休んでいる人がいるとする。その人が休んでいる理由を知らないのに、その人の休んでいる理由を勝手に想像して、仲間の間で勝手に盛り上がって話をする場合があります。とこのことはとっても良くないことだと思います。学校に行くことは、沢山のことを学べたり集団が協力して生活することに意義があると思います。でも、一方ではこの世の中には色々な種類の多くの道が広がっているし、その人が決めた生き方なのだから、他人がそれを止めたり無理矢理学校に来させるのではなく、認めてあげるほうがいいのではないのでしょうか。そして、自分自身の考えがあることはとても良いことだと思うし、その考えをしっかりと持っていたほうが良いと思います。最後に、『自尊心』とは、大人になってから持てるようになるのではなく、子供の頃からの経験から養われるものだと思います。だから今の私たちの歳ごろから、自分の強い意志を持って生活することが大切だと思います。そして、何より大切なのは、『自分らしく生きる』ことだと思います。だから私は、全て人と同じようにするほうがいいのか、人と同じように行動しないといけないと考えるのではなく、自分は、『こうなる』『こうでありたい』と強い意思を持つことが大事だと考えています。こういった種類の『想像』は、自分のためになるから大切だと思います。これからも私は、『自分らしく自分らしい自分の人生』を進み続けるために、強い意思や考えを持ち、たくましく生きたいと思っています。そして、自分勝手な想像をしたり他人の心を傷つけるような行動はつつしみ、まっすぐ自分の道を進んでいきたいと思っています。

いじめの空気

双葉中学校二年

田中 優杏

偶然ついていたテレビ番組に私はくぎつけになりました。それは、NHKの「いじめをノックアウト」という番組でした。中学生の男の子が、いじめによって自殺したという内容でした。私と同じ中学生がいじめで自殺したということが、とても衝撃的でした。その男の子は、夏休みの人権作文の課題で「空気」というタイトルの作文を書いていました。「いじめの原因は何かを伝えよう。それは『空気』だ。これが目に見えないものだから恐ろしい。いじめの加害者・主犯でさえも空気によって動かされているのだ」この文を読んで私は、今まで、いじめは何が原因で起こってしまうのだろうと思っていたので、空気が原因ということに気づかせてくれました。私は、いじめられた経験はないけど、悪口をいわれているのではないかと心配になったことはあります。私がそういう風に感じたのも、その時の「空気」が原因だったのかなと思いました。番組の中で、その作文について高校生が話し合いをするという場面がありました。そこでは、高校生たちが色々な意見を出し合っていました。もし、私がその話し合いに参加しても、自分の意見を言えないかもしれないなと思いました。その話し合いの中で、「いじめられた側にもいじめる側にもまわったことがある」と、いじめに加担してしまった後悔を正直に語っていた人がいました。その子は、「二年生のときにリーダー的な子がいて、『あの子ちょっとイヤじゃない?』とか言われたときに、うまく断ることができない。どうしても、無視というか、気づいていないふりとかしていました。」といいました。出てきたキーワードは、「リーダー的な子」でした。私も、リーダー的な子に同調しないと自分が浮いてしまうと思ったことがあります。でも、それは、自分のことしか考えていない、勝手な考え方だったなとすごく反省しています。私と同じようにリーダー的な子に合わせないと、感じたことのある人もたくさんいるのではないのでしょうか。そ

れも「空気」が原因のような気がします。リーダー的な子が自然と、自分に意見を合わせないといけない空気をつくってしまっているのだと思います。でもそこで、だれかが自分の意見を言えば、空気も変わって、リーダー的な子に合わせる人が少なくなるはずです。自分の意見を言うということは、難しいことだけど、とても大切なことなので、私も自分の意見を言うようになりたいと思いました。暴力をふるったり、悪口を言ったりすることは、もちろんいじめだけど、そういう空気をつくるということも、いじめの原因になるのだとすれば、自分も知らないうちに、誰かを傷つけたり、悲しい気持ちにさせる空気をつくってしまったかもしれないと思い、すごく怖いことだなと思います。そこで、私ができることは、いやな空気になったときに話を変えてみたり、明るい話題を出して、その空気をこわすことなのではないかと思います。今、SNSのかきこみが原因で、芸能人が自殺したというニュースがあります。見えない人から悪口を言われることは、とても恐怖だと思います。これも、「空気」が原因だと、私は思いました。悪口を書いていいという空気があったから、どんどんひどい悪口のかきこみが増えていったのではないのでしょうか。直接人に意見を言うことはできないのに、顔が見えないからと、SNSで悪口を言ったりするような、弱い人間には、絶対になりたくないです。このように、いじめが原因でたくさんの方が命を落としています。それは、いつ自分の身の周りで起きてもおかしくなくと思います。新型コロナウイルス感染拡大防止のための休校中、友だちに会うことがほとんどできませんでした。そこで、友だちが自分にとってどれだけ大切かということを実感しました。なので、友だちを傷つけたり、悲しい気持ちにさせないような空気づくりをしたいと思っています。

他人を想うあたたかい心

双葉中学校三年

志摩 歩奈

最近、テレビをつけるといつでも、どの局でも、コロナウイルスの話題が出ています。取材の中で、電車に乗っていた人が咳をしたら睨まれたり、遠ざけられたりして、怖くなって一つ前の駅で降りた、と話していて、私まで怖くなってしまいました。世界の中でも、親切な国で有名な日本のイメージが、コロナウイルスによって神経質で厳しい国にあつたという間に変わってしまったように感じました。もちろん、親切で、前向きな人達もいるし、コロナが収束すればもとの日本に戻ると思いますが、今のままでは人が人を想いやる気持ちはそれぞれちがう方向を向いたままになってしまいます。自分の身は自分で守るのは当然ですが、他人のことも気にかかけたり、家族にもまめに体温を測るように呼びかけるだけでも、思いやる気持ちは伝わるはずです。私の母は、スーパーの店員です。毎日、レジでお客さんと接しています。今は、どのお店もレジの前には大きなビニールカーテンやアクリル板で店員とお客さんとを仕切っています。お金も、コイントレーに乗せて直接手に触れないように徹底しているそうです。しかし、はじめは「私が汚いみたい」と言われたり、悲しそうな顔をするお客さんがいたり、逆に、店員を汚い物として接したりする心無い人もいたそうです。医療に携わる人達が差別を受けたり、コロナ病院、コロナホテルと言われたりしているということも、ニュースで知りました。家族も病院へ毎日通っているのですが、正直、どこで病気をもらうかわからないので延期してもらっています。お医者さんや、看護師さんが診てくれないと、持病

がある人や急な病気の時に困るのは、私たちです。役割はそれぞれ違いますが、スーパーの店員をしている母達がないと、必要品は買えません。そんな母も、弟を預かってくれる幼稚園があるから働いています。たくさんの人達が、互いを思い合っているのがよく分かります。毎日毎日、マスクを外せない日々が続いて、目に見えない敵と常に戦っています。私の自粛期間は中学生らしい生活を送ろうと決め、掃除、洗濯、料理、勉強を気付いたときにして過ごしていました。ときどき、外出したくなりましたが、家族に高齢の祖父母や、まだ小さい弟がいるので、必要最低限の外出以外はまったくと言って良いほどしていません。でも、そんな毎日でも、休めずに働いている方たちは、たくさんいらっしやいます。国民や、大切な人を守るために頑張っている人を言葉で傷つけたり、心無い軽率な発言で、間違った正義感を振りかざして自分一人だけ良い気にならないでください。間違った価値観を押しつけないでください。先の見えない、暗い道を少しずつ歩んでいるような現状で、私も不安ですが、互いを思い合って、助け合う努力を続けていけるようになります。言葉の暴力で傷つく人がいなくなる世の中になれますように。